

読書

災害で変わる人類

東日本大震災後、貞観十一(八六九)年に起きた「貞観地震」がにわか注目を浴びた。今回とほぼ同じ規模の地震と津波が発生して大きな被害を出し、「もしもこの教訓が生かされていたら」とする論争を引き起こした。「環境史」はこうした歴史の教訓に学び、さらに人類と環境のあるべき姿を歴史に探る歴史学の一分野である。一九七〇年代から欧米を中心に多くの研究者が参入してきた。ちょうど地球規模で環境の悪化が問題になってきたころだ。

その最大公約数的な定義は以下の通りである。「人類史のなかで、自然の環境変動や人類による環境変化がどのように発生し、その結果人類はどのような影響を被ったのかを、時間・空間的に追



環境史 ①



石弘之

いし・ひろゆき
1940年生まれ。新聞記者、東大教授、ザンビア特命大使などを歴任後、環境問題研究者に。著書に『地球環境報告』『名作の中の環境史』など。

北原糸子編『日本災害史』ほか



究する学問領域」。学際的であるだけに、さまざまな分野の研究者が加わって多岐にわたる歴史が展開される。「災害史」も環境史の一部である。

今回の大津波の惨状を予想していたかのような吉村昭『三陸海岸大津波』(文春文庫)は、三陸の過去の津波を詳細に調べ上げた記録文学である。「海は大自然の常として、人間を豊かにする反面、容赦なく死をも強いる」という一文が印象的だ。

伊藤和明『地震と噴火の日本史』(岩波新書、品切れ)は、狭い日本列島で繰り返されてきた災害の歴史が手際よくまとめ

られ、災害は一方で「多様な自然景観」をつくりあげてきたと指摘する。

本格的に災害史に挑戦したい向きには、北原糸子編『日本災害史』(吉川弘文館)が歯応えがある。神話の時代から阪神淡路大震災まで、十三人の執筆者の分担によって論じられ、改めて災害列島であることを実感する。

災害史のなかでも「疫病史」は大きな分野であり、多くの著作が刊行されている。疫病の流行は病原体があるから発生するのではなく、多くの場合、人類側の生活環境の変化や自然の改変が病気を呼び込むことで起きる。なかでも山本太郎『感染症と文明』(岩波新書)がもっとも説得力がある。著者は医学の教授であり東日本大震災の救援活動にも加わった。名著のほまれの高かった立川昭二『病気の社会史―文明に探る病因』(岩波現代文庫)が文庫化された。時代が特定の疫病をつくりだしてきた事実が豊富なエピソードで語られる。